

# 本州北端における異系統土器の派及と展開

鈴木 克彦

## 序

縄文社会において、文化の動向は土器型式に強く反映する特徴がある。コミュニティの思惟、社会的なアイデンティティ、或いは生活の様式などの諸要素が複合して投影されていて、文化の構造を考える上で指標になることも明白である。

縄文時代晩期の東北地方の（縄文）文化を「亀ヶ岡文化」と呼び、亀ヶ岡文化の内容を考古学的に最も特徴づける遺物のひとつが亀ヶ岡式土器である。それを古い順に大洞B式からA式まで分類していることは周知のとおりである。いわば大洞A式はこの地方での最後の縄文土器という訳である。これに直接後続するものが砂沢式である。つまり、後者はこの地方の最初の弥生土器となる。

大洞A式と砂沢式の関係は、かつて砂沢式をA式の地方差とされたこともあった。今日では概ね上記のとおりに年代差とされるようになったが、今なお型式の細別分類が明確になっているとはいえない。事実上、両者を分けることは縄文か、弥生かを規定することになり、時代区分の問題として歴史の構成に関わる問題に発展する。

日本史の発展にはいくつかの大きな変革の画期が存在する。縄文時代から弥生時代への変遷も、狩猟採集の生活から稲作農耕の生活に転換する歴史的な「事件」のひとつに数えられる。

稲作農耕の生産形態をベースに金属器などを持つ弥生文化は朝鮮半島から北部九州に伝わり、次第に西から東へ波紋の如く拡がり、やがて本州の北端まで拡大席卷することは、青森県垂柳遺跡の水田跡の存在によって理解することができる。しかし、この過程は日本列島の各々の地方によって一律ではなく、弥生文化の波及並びに受容の様相及びその展開に地方差がある。日本列島の地方差を連繫させるためには、土器型式を中心とする編年体系の確立によって行うのもひとつの方法である。

小論では、弥生文化の北進する過程の一端を、日本列島北の一地方であるがゆえ、ともすればカヤの外に置かれがちな本州北端の「最後の縄文文化」である亀ヶ岡文化の終末期の様相を通して考えてみたい。

最後は新たな開始と表裏一体の関係にあり、極めて連続的である。その間の実態を明らかにすることが、小論の主なる目的である。



## 一 異系統土器について

文化が変化、変容する際には、異質な系統（異系統）の文化（異文化）の摂取や影響による場合と、伝統的な文化を自から段階的に変化させてゆく場合とがある。その変化の度合は、前者の場合衝撃的で大きく、後者の場合連続的でゆるやかであることが多い。前者のそれは今風にいえばカルチャー・ショックということになろう。しかし、これらを文化の現象として把える場合、両者が複雑にからみあっていて選り分けることが容易でない。亀ヶ岡文化の終末期の様相は、実にこのことをよく反映している。

日本の縄文文化において異文化とは、人種、言語の違う民族の渡来によってもたらされたもので、縄文晩期終末に北部九州から出土する朝鮮無文土器がある。日本の弥生土器は縄文土器よりこの無文土器の系譜を引き、その土器の製作技法が強く影響して遠賀川式の弥生土器が成立したとされる。渡来人による異文化を吸収して、北部九州の縄文晩期終末の山の寺式で成立した在地縄文土器との複合的土器組成を持つ最初の稲作文化が、次第に生産の基盤を確立しながら縄文土器の組成をかえ、朝鮮半島南部に由来する社会の基本要素を保有して遠賀川式土器を形成した（家根祥多 一八九七）。このように日本の稲作農耕は、朝鮮半島南部から渡来者の移住による異文化の導入によって開始された。この点に、日本史上における弥生前期の社会的な特質がある。

西日本の弥生前期の土器を総称して呼ぶ遠賀川式土器（工業善通 一九八七）は、板村Ⅱ式の段階に入って西日本全体（太平洋側では伊勢湾沿岸、日本海側では奥丹後半島あたり）に分布する。その分布（文化）

圏の成立が物語るものは、西日本の弥生化の席卷完了であり（家根、前掲）、縄文土器の要素を欠き縄文的集団関係を打破し再編成する動きとして最初の到着地（北部九州）をこえて農耕を拡大する弥生文化の東方波及を示す（後藤直 一九八六）ものであった。当然、この過程で西日本の各地で水田が営まれた。前期末から中期にかけては、農耕社会を母胎に環溝集落や青銅器を副葬する甕棺墓などが造られ、政治的社会が形成された。しかし、「一見齊一性を保ってみえる遠賀川式土器の持つ細かな地域差や、墓制における地域差にも、その受容の過程が必ずしも一様でなかった」（家根 前掲）。そして、この土器は前期中頃には関東、北陸地方へと東進し、ついには東北の北部（青森県）にまで北進した（佐原真 一八九六、工業 前掲）。

その出土地は、筆者の調査で東北地方では一帯にわたる四五ヶ所、うち東北々部では秋田県二ヶ所、岩手県三ヶ所、青森県一八ヶ所に及び、青森県に最も多いのが特徴である（註一）。

その土器の性格から考えて、秋田県や青森県のような本州北端に多くみられること自体問題になると思うが、これに係る様々な問題を考える前に少し研究史についてふれておくことが必要ではないかと思う。

この種の土器が東北地方に出土することを初めて紹介したのは、宮城県柞形田貝塚から出土した類例を、遠賀川A型として縄文を使用する点を除けばそれに著しく類似し、弥生式東方への発展は遠賀川系土器の姿相を持って行われていると明記した、杉原莊介氏である（杉原 一九三六）。柞形田貝塚を発掘し柞形（田）式を設定した山内清男氏は、それに刷毛目があることから弥生式風と述べるに留まった（山内 一九三二）。



伊東信雄氏は杉原氏の所見を受け、宮城県南小泉遺跡出土の類例を紹介（伊東 一九五〇）すると共に、秋田県の志藤沢式に刷毛目があることを示し（伊東 一九六〇）、枅形甕式に伴う遠賀川式や靱痕土器、宮城県金山町河原田出土の磨製石剣などに基づいて、積極的に「東北地方の縄文式文化は大洞A'式を最後として、弥生式の文化に移った（伊東 一九五〇）」という考えを予言的に開陳した。以来、この伊東説が東北の弥生文化論のベースとなって研究をリードしてきたことはよく知られている。江坂輝弥氏もまた、青森県東南部の大洞A式に伴存する粗製土器（遠賀川系）が枅形甕式に伴う粗製土器に類似するものであることを紹介した（江坂 一九五七）。少し下って中村五郎氏、児玉華氏らは東北の弥生式を、関西地方（畿内）や北陸地方などの弥生式と関連づけて扱っていた（中村 一九七六、一九八一、児玉 一九七五）。特に、福島県では鳥内遺跡など古手の弥生式の発見や類例の紹介がなされたし、秋田県の志藤沢遺跡、宇津ノ台遺跡の発掘でも良好なる資料が明らかになった（文献略）。しかし、一九三六年の杉原氏の論考をみて以来、この種の土器が再び西日本の遠賀川系統の土器であることが明白にされるのは、一九八二年の青森県立郷土館開催による特別展「弥生時代の青森」に出品した青森県南郷村松石橋遺跡から出土したとされる被籠壺型土器（鈴木克彦 一九八三、市川金丸、木村鉄次郎 一九八四）が遠賀川系の土器であると指摘されたことによる。この間、青森県をはじめ各地でこの種の類例が資料紹介等に報告されていたが（青森県分は表1の文献参照、他は省略、福島県で木葉文など畿内I様式の土器が存在することや、中村五郎氏による編年的研究の中でこの種の問題が取り上げられた以外に具体的に

論じられることはなかった。

このように東北地方を舞台にした弥生文化の形成に対し、稲作文化を中心に弥生編年の問題を通して論じた泰斗と呼ぶべき伊東信雄氏を除いて、主として東北弥生文化の中に異系統な土器を見出し、それを広範な土器の移入の仕業と考えた中村、児玉両氏の取り扱った土器には、地域性と年代に違いがある。しかし、これがして東北の異系統な土器の地域と年代差に基づく実態を浮き彫りにされているといえる。つまり、中村氏のそれは、主として木葉文の土器、水神平式の条痕文土器を出土する東北の南端である福島県の様相、児玉氏の方は斜格子文、ハケメなどに代表される日本海に位する秋田県の様相を明らかにしたものであると思う。これに近年佐原真氏や工業善通氏らによって明らかにされた遠賀川系土器と東北々端の青森県の様相を加えることによって、元来異文化の移入によって開始された弥生文化の本州北方に対する伝播の問題がかなり具体的に明らかにされることになろう。

東北地方から出土する遠賀川系土器について、佐原真氏は次のように規定した（佐原 一九八六、八七）。その土器が、西日本の前期弥生土器に似ていることから、西日本から運ばれて来た遠賀川式土器とそれを模倣して地元で作られた土器とをあわせて「遠賀川系土器」と総称し、これが砂沢式と共にみいだされることから、この遠賀川系土器は砂沢式の構成要素のひとつで、亀ヶ岡系と遠賀川系との「合いの子」（折衷土器）の三者によって砂沢式が構成される、というものである。この所論は、砂沢式の性格を考える上で極めて重要な指摘であるといえるが、遠賀川系、折衷の土器は砂沢式に共伴する別物でないとするとところに特徴



がある。このような佐原説には、それが西日本から人々が渡って来て東北で作られたものとする所見が背景にある。

佐原氏は遠賀川系と折衷土器にみられる西日本の遠賀川式に共通する技法の特色として、次の一〇項目を上げた。

- 1、砂の混和      2、ヨコナデ      3、ハケメ      4、ヘラミガキ
- 5、ヘラ描き沈線紋      6、木目沈線紋      7、木目別点紋
- 8、木目刻目紋      9、黒紋      10、黒塗

その上で同氏は亀ヶ岡式との異同を論じ、砂沢式を構成する遠賀川系、折衷土器は亀ヶ岡式と基本的に異なって西日本の遠賀川式に共通する技法がみとめられ、それが遠賀川式の中段階に対応するとした。一般的に遠賀川式は前期弥生土器を総称して用いられる（工業、前掲）ので、弥生前期中頃と理解してよいであろう。このような佐原説といえる把え方が、東北の遠賀川系土器に対する考え方のベース並びに主流になっっている（工業 前掲、須藤隆 一九八六、八七）。

これらの多様な土器は、東北の縄文晩期（亀ヶ岡式）の系譜から外れる土器として、同時に東北以外の地域に関連づけられる土器として、東北では異質な土器とみることができる。つまり、その出自に東北在地の系統を欠き、元来異文化の影響によって生れた弥生式の特徴を体した土器として、異系統な土器と呼ぶにふさわしいものといえる。

なお、この他に異文化に由来する異系統土器とはいえないものの、晩期終末に出土する、出自不明ないくつかの土器がある。その“もうひとつの異系統な土器”もまた、東北の晩期終末の様相を物語るものとして等閑視することができない。

ここにいうもうひとつの異系統な土器の一群とは、遠賀川系土器などのように由来を西日本及び東北とは地理的に隣接しない（遠隔）地方に主体が求められる土器と違って、亀ヶ岡式の中から伝統的に出自しないか、或は亀ヶ岡式の伝統的な文様施文体系などから外れる特徴を体した土器、或はその由来が必しも定かでない土器のことをさす。

註1 この数字はさらに増加するであろう。ハケメのある（粗製）土器までを対象にすれば、恐らくこの数字は変動すると思う。また、その場合遠賀川系統とあるものの定義や用語の使い方、或はその観察のしかたも問題になると思う。

## 二 もう一つの異系統な土器

最後の縄文文化である亀ヶ岡文化の開始と終焉は、亀ヶ岡式の土器の成立の終末に同じであるし、そうでなければならない。いいかえるなら、亀ヶ岡文化は亀ヶ岡式の成立と共に始まり、その終焉と共に終る。同時に縄文文化もまた終焉する。

その終末期に、大洞A式とA'式があたる。亀ヶ岡式が大きく変質する時期（段階）である。いわば、最後の最後、最終である。筆者は、これを亀ヶ岡式らしからぬ、いいかえると縄文式らしからぬ土器と、かねてより認識している。

亀ヶ岡式土器は、三叉文を主体にすえた入組文を基調に施文する特徴を持ち、入組三叉文系の土器と把えることができる。その文様構成の系譜は大洞B式に主体的な三叉文に始まり、大洞C2式に主体的な雲形文



で終る。これに対し、大洞A式は平行沈線文を基調に施文する工字文と、それを變形させた變形工字文の大洞A'式へと推移する。大洞A式の古手のものには入組三叉文系の文様が残存するが、大洞B式からA'式までの変遷の上では大洞C2式とA式との間に施文手法に隔たりが大きい。厳密に言えば、大洞C2式以前の土器を純正な亀ヶ岡式とするなら、大洞A式以降は亀ヶ岡式らしからぬ文様構成とみなすことができ、その段階で亀ヶ岡式の施文手法、文様構成は一応の終息をみたと把えることができる。すなわち、曲線的な入組三叉文系の様式の終焉である。しかし、小論ではこの問題に深く立ち入らないことにする。

さて、これにいうもうひとつの異系統土器とは、前項で述べたとおり亀ヶ岡式とか大洞式系統の伝統的な示標を欠く器形、文様を持つ土器のことをさす。その一端を粗く述べたことがあるが（鈴木克彦 一九八七）、中村五郎氏は古くから体系的にまとめている（中村 一九八二）。

具体的には、器種、器形の上では、四足の土器、三角帽子形の蓋型、壺形とも甕型ともつかぬ広口の（粗製）壺甕型、文様の上では斜線文、降線文、縦位直線文、鋸歯文、矢羽根文、渦文、曲線文、浮線網状文、条痕文などを摘出することができる。要するに伝統的な亀ヶ岡式の体系から外れる特徴を体した土器である。これらについて、前項で必しも由来が定かでないとししたが、中村氏の指摘にあるとおり東日本一帯に視野を拡げると他地方或は東北の近隣に相互の関係を把えることのできるものも少なくないし、厳密に言えば外縁からの影響の下にあるもの、やはり亀ヶ岡式の内部から出自する可能性があるものがあると思う。仮りに後者の場合であっても、具体的に出自の過程や理由が明瞭でない例

が多い。逆に前者の場合も東北南部に出土する浮線網状文、条痕文の土器など近縁の地域に関連性が求められる相互の影響の過程や、それによって亀ヶ岡式がどのように変容してゆくのかなど、十分に把握されていない例が含まれる。要するにこれらの問題は今後の研究によって容易に解消されるに相違ないが、ここでは右に示した問題点の指摘に留めたい。

これらの一連の土器には地域的な差、或は年代的な様相の差があると思う。ただいえるのは、これらの土器は工字文が出自する前後に顕著であるということである。そして、次項で取り上げる遠賀川系土器が派及する前段階に顕著である。これは偶然の所産と考えられない。

ところで、筆者は大洞A式（とA'式）は日本史編年で弥生時代に位置づけられると考える。そうすれば当然弥生前期に相当する。

中村五郎氏は、大洞A'式の後半の時期は三重県まで明確な弥生式の範囲に入っており、A'式の時期を縄文文化とできないことを述べ、縄文文化直後と考えている（中村・前掲）が、しかし、それが弥生文化の所産だといっている訳ではない。

筆者は、かねてから大洞A式を境に以後の砂沢式までを縄文式らしからぬ（当初の発言では亀ヶ岡式らしからぬ）縄文土器と考え、そういう発言をしてきた。その真意は、それらが弥生時代に併行すること、磨消縄文を持たない（註1）で直線的な文様をもって構成されることから、亀ヶ岡式と相違すると考えたからで、弥生時代になお継続（残存）した縄文式という主旨であった。その背景には、「縄文式の終末は地方によって大きな年代差を持たなかった（中略）三河と東北に於ける差は僅々土器一型式、畿内と東北の間にも二三型式の差を超えない」（山内清男



一九三二」とする定説を様々な意味で吟味検討したい思いがあったからである。仮りにそれらを弥生式とみると弥生式らしからぬ、縄文式かというところとまたしかり。そこで一考したのが、弥生時代の縄文式と考えてはどうかというものであった。それにどういう概念を与えるかとなると、縄文式が弥生時代まで続いて残っていたという意味で縄文と呼び、山内清男氏のいう北海道の縄文（山内 一九三九）とは区別し、「東北の縄文」と考えてはどうかというものであった。もちろんこれは画龍点睛を欠き、特に亀ヶ岡式の終末型式に対する認識が山内氏のそれと異なるため、ここで再論するつもりはない。しかしながら、中村五郎氏のいう大洞A式でないというながら、山内氏は枳形罎式に対し、鉢形壺形土器の湾曲、刷毛目、紋様の細部で弥生式風の部分を見出し、一見弥生式とは見えない縄紋式直後の土器（亀ヶ岡式の末期に直ぐ続く型式）と述べ、土器は縄紋式的であるが、（片刃石斧、石庖丁などの）伴出遺物から弥生式風の生活状態を持っていたと認識していた（山内 一九三二）。この文意は、筆者には縄文のことをさしていると思えない。山内氏の縄文とは、主として北海道、意図としては弥生文化に対する対極として用いているものと考えられる。関連して、最近おもしろいエピソードが語られた（林謙作 一九八七）。縄文ならぬ縄（エビ）縄文である。これは縄文の概念を崩壊させるもので、ひとつの問題提起としては受けとめても山内氏の「縄文」の概念とは違う。

近年の当該期の問題に係る風潮に、縄文の問題を忘却するきらいがあることを憂慮し、たびたび警鐘を鳴らしてきた（鈴木 一九八六、八七）。大洞C2式からA式にかけてもうひとつの異系統土器と違う、明ら

かに亀ヶ岡式の体系の中から萌芽した土器がある。この二律背反こそ、「北の文化」を理解する上で重要なことなのである。

註1 正確に言えばそれが無い訳ではないが、その手法は消失する方向にある。区画文の内部を充填する方法はほとんど無い。

### 三 本州北端の遠賀川系土器

東北々部三県における異系統土器の様相は、福島県に代表される東北南部の様相と若干異なり、木葉文土器や水神平式の条痕文土器は今のところ出土していないし、東北の晩期終末の様相を示す特徴に数えられる、もうひとつの異系統土器の仲間である浮線網状文の土器も見当たらない。その中間に位する宮城県、山形県の様相をみても、同じ東北といながら各々に地域的な特徴があるように思われる。北部三県の各々の様相も同様で、多少の差がある。むしろ、問題意識の置き方次第では地域差が顕著であるといつてよい。例えば、現在のところ岩手県の場合、筆者が把握した類別は三遺跡にすぎないが、大船渡市長谷堂貝塚の類別（岩手県教育委員会 一九七二、草間俊一 一九七八）は宮城県の枳形罎式、二戸市金田一川遺跡（亀沢磐 一九五八、芹沢長介 一九六〇）、軽米町君成田Ⅳ遺跡（岩手県埋蔵文化財センター 一九八三）の類別は青森県に求められる。しかし、この遺跡数の現状は、岩手県下の洗い直しをするならもっと増加すると予想される。

同じく秋田県の場合をみても青森県に較べると少し年代が下る例が多いように思われる。しかし、秋田市地蔵田B遺跡など古手の類別がない



訳ではないし、北部三県では比較的良好な資料が認められるといっている。これに対し、青森県の場合は筆者が調査しやすいということもあつてか、表1のようにひととおり年代順に沿って資料を示すことが可能となつた。

しかしながら、東北及び東北北部の資料にはまだバラつきがあるように思う。その理由は、遠賀川系なるものがごく最近話題に上つたように、その把握のしかたが存地研究者に徹底していないことや、過去に報告された資料の洗い直しがそれぞれの地域で十分に進んでいない事情による。その再検討が徹底すれば遺跡や類例の数量は倍々増するであろうし、その実態もかなり詳しく明らかになるものと思う。その際注意しなければならぬことは、今日いうところの遠賀川系なるものの定義、分類、把握、認識のしかた、或いはそれらのし直しが必要ではないかと思う。

既述した佐原説は、確かにセンセーショナルなものとして有意義なものであつた。在地研究者に新たな眼を開かせる啓蒙の役割を十分に果たしたが、あとは在地研究者に下駄をあずけると述べているように研究の課題は多い。西日本の研究者の手で着目された反省を克服すべき努力はしなければならぬと自省している。一九八六年の日本考古学協会八戸大会で発表された佐原説を受けて進められた当該土器に対する研究は、佐原説に沿った形で進められている反面、多少拡大されて解釈されている傾向がある。いずれにしても、ともすれば異系統とされたり、異質な土器の存在に対して具体的に遠賀川系という比較の対象を限定させて明らかにした意義は大きい。

前章と多少重複するが、佐原説は遠賀川式つまり西日本の前期弥生土

器に似た土器に対し、西日本から運ばれてきた遠賀川式（搬入土器）と、それを模倣して地元で作られた土器（模倣土器）をあわせて遠賀川系土器とし、これに合いの子（折衷土器）を加えて、亀ヶ岡系の三者から砂沢式が構成されると考えるものである。

これに対し、この佐原説をベースにしているものの須藤隆氏の考え方は遠賀川系は搬入と模倣と折衷の土器から成り、砂沢式に共伴するといふ（須藤 一九八六、八七）もので、両者は微妙に異なる。両者の違いを図式にすると次のとおりになる。

佐原説 砂沢式＝亀ヶ岡系＋遠賀川系（搬入＋模倣）＋折衷  
須藤説 砂沢式＋遠賀川系（搬入＋模倣・類似＋折衷）

両者の大きな違いは、遠賀川系は砂沢式に伴う別物でなく砂沢式の構成要素のひとつであるとする佐原説、対して須藤氏は遠賀川系が砂沢式に共伴する可能性が強いことを指摘している点にある。このように遠賀川系と砂沢式をめぐる見解に違いがある。共通する点は、遠賀川系には西日本で作られたもの（遠賀川式の搬入）と地元で（出土地やその近縁で模倣されて）作られたもの（遠賀川系）があるということである。

確かに搬入の性格を与えてよいか、止むをえない土器はあるが、少くとも遠賀川の名称のルーツにあたる北部九州のものでないことは器形や沈線文の様子が全く違うことから確実である。佐原、工業氏及び伊東氏らは大阪、奈良、三重或は愛知県あたりとの関連を想定している（伊東 一九八四）。胎土分析の結果では是川中居遺跡から出土した一点の土器が、北陸方面などの遠隔地で製作された可能性が指摘された（清水芳裕 一九八七）だけで、東海や畿内にそのルーツを目された松石橋の土器な



どは、在地製作という所見が示された。したがって、搬入か否かの問題は、搬入元を具体的に特定できないのが現状である。さらに、それが伊勢湾周辺と仮定しても土器が約千キロに及ぶ距離を直接伝播したとみるより間接伝播、つまり当然中継ぎの問題も考えなければならぬ。それ以上に、遠賀川式の運搬者が本州北辺の東北北部に北進して移動しなければならなかったか、その歴史的な背景を同時に推考しなければならぬ。と同時に、模倣という問題においても、模倣する主体者が模倣をするもののモデルや情報を入手するか、その存在を知っていなければならぬ。その場合、モデルや情報と隔絶しては不可能なので、それが近縁（百キロ～二百キロ以内の範囲）に存在しなければならない。

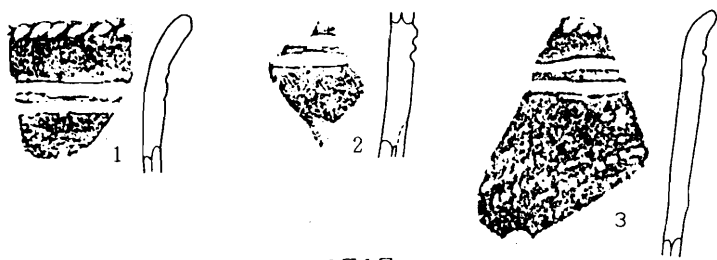
いずれにしても現状では青森、秋田県の資料が突出していて、中抜きの状態にあることを否めないで、こういう問題をより具体的に検討してゆく必要があるが、事実としてこういう違いがあったとしても現状ではこれを区別できないのではないかと思う。仮りにあったとすれば、砂沢式期とそれ以前の段階に認識されることである。

次いで、やはり上述の問題が尾を引くものの、合いの子つまり折衷土器とした縄文や波状口縁など、亀ヶ岡式の伝統的な特徴と遠賀川式の特徴をかねそなえた土器の解釈や分類にある。確かに感覚的には折衷型と呼んでやむをえないものもあるが、それが全て遠賀川式の影響によるものか疑問がある。通常は、主として体部に縄文が施文された上に、胎土に砂礫を含み、口端に刻目を持ち、口縁部が外反し、口頭部に二～三条の平行沈線文を巡らしたり、連続刺突文を充填したり、口縁部にヨコナデ、ハケメ、体部にハケメの器面調整がみられるものが当該する。中に

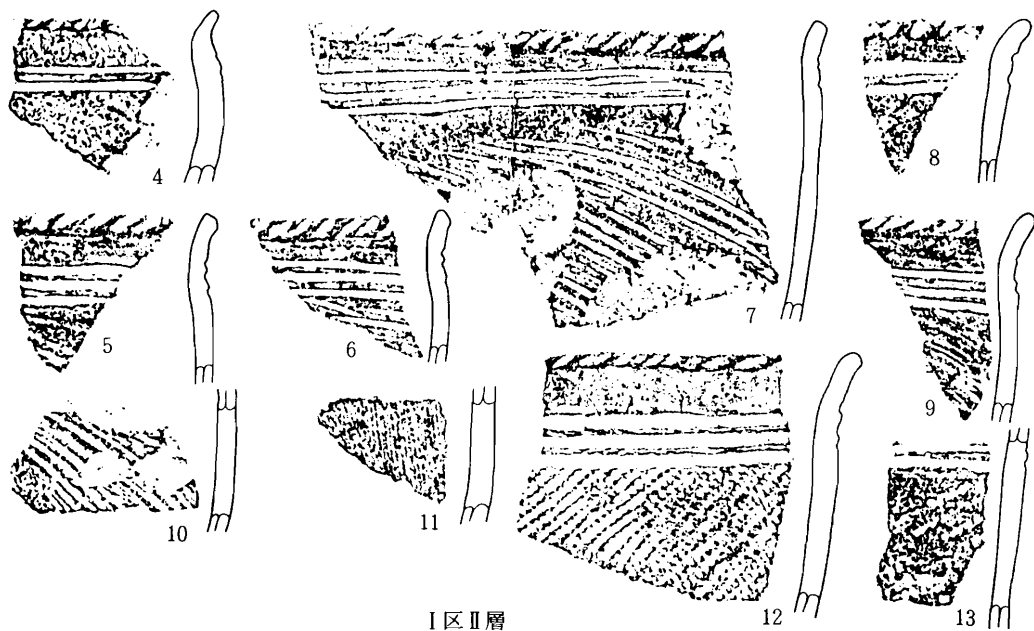
は条痕文の土器がこれに当てられることもあるが、筆者はこれを遠賀川系とはみていない。ヨコナデ、刻目も全てが遠賀川系の技法であるか検討を要する。口縁部の外反については、確かに亀ヶ岡式のノーマルなものには内反傾向にあって対照的ではある。外反の度合がゆるいがため、甕型と断じがたい深鉢甕の形態を示すのが特徴であるが、遠賀川式の外反は強い。亀ヶ岡式も大洞A式以降は次第に外反するものが多くなる。いずれにしても、どの要素に着目するかによって多少の見解差が出てやむをえない点は認めなければならないが、その占める割合が一二～一九％（工藤竹久 一九八七）となるかどうか、剣吉荒町遺跡第2地区では一％を下る。

最近の傾向としては、この折衷型を認めることによって比較的幅広く解釈することが多いように思われる。筆者はそれに逆行する立場をとるので、上記のように数値に開きが生じるのであろう。これは単に曖昧なものを外すという姿勢の違いだけでなく、当該期に対する認識の違いによるところが大きい。すなわち、筆者は大洞A式を含めて砂沢式までに至る土器型式の変化には一系統ではない、近縁、遠隔の諸要素が複雑にからみあって派及していると考えられるものである。仮りに、大きな幹となる潮流が遠賀川系の派及にあったとしても、中継の役割を果たした中間に当る地域の諸要素と併せて、亀ヶ岡式自体が変化した諸要素が複合して型式に反映していると考えるのである。そういう意味で、明らかに搬入の土器があればそれを把握したいと思うが、模倣、折衷の問題は大洞小異にすぎないと思うので、遠賀川式の土器製作技法の影響によってこの地方で製作された土器を遠賀川系土器と解釈し、その度合の強弱によつ

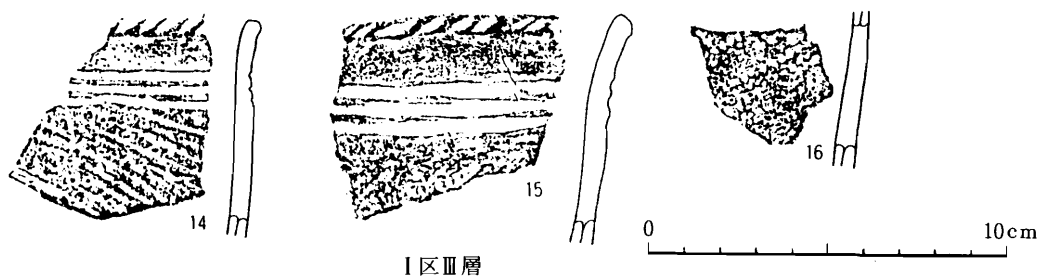




I 区 I 層



I 区 II 層



I 区 III 層

图 1 剣吉荒町遺跡第 2 地区(1)



て搬入→模倣→折衷を便宜的に使い分けをしておく。

# 1 派及の段階

東北地方における佐原氏らのいう遠賀川系土器の出現は、砂沢式の時期とされてきたが(佐原 前掲、工業 前掲、須藤 前掲、工藤竹久 一九八六、八七)、筆者はかねてより名川町剣吉荒町遺跡第2地区の発掘所見に基いて大洞A式に求めた(鈴木克彦 一九八六)。砂沢式と大洞A'式の分類は多少問題ありとするものの、剣吉荒町遺跡第2地区の発掘(青森県立郷土館 一九八八)では両者は別型式に分けられると思う。いずれにしても、青森県におけるその初現がA'式に求められることは動かないものと考ええる。

剣吉荒町遺跡第2地区の1区から出土した資料(図1~2)の図1は、大洞A'式の中・後位にわたる土器と伴出する関係にある。図2の1~7は各地区より出土したものを摘出したもので、概ね大洞A'式に共伴関係を求めてよいと思う。

図1のうち、ハケメのある2と11、小型甕型の4は明らかに遠賀川系である。5~7、9、10、14は条痕文を施文する深鉢型で、筆者は遠賀川系とみていない。3、8、12、13、15、16は体部に縄文を施文する折衷型と呼ばれているもので、1も同様と思われる。これらに共通する点は、口頸部に二~三条の平行沈線文を巡らすことと、口端に斜めの刻目を付すこと、口縁部に横ナデの器面調整がみられること、胎土に砂礫を含有することなどである。図2のうち、1と2は壺型、3は大型の甕型、ハケメのある4、5らは遠賀川系、同一個体と思われる6、7は折衷型

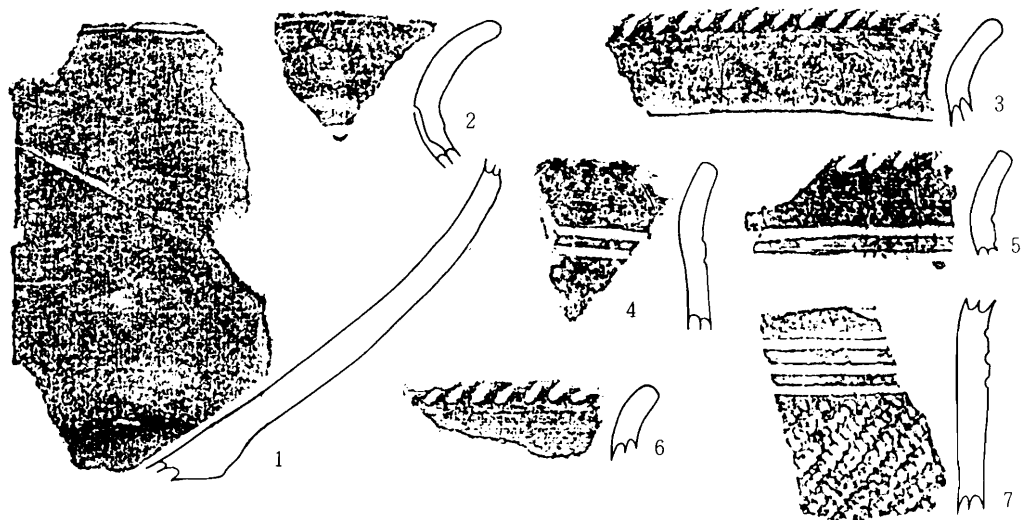


図2 剣吉荒町遺跡第2地区(2)



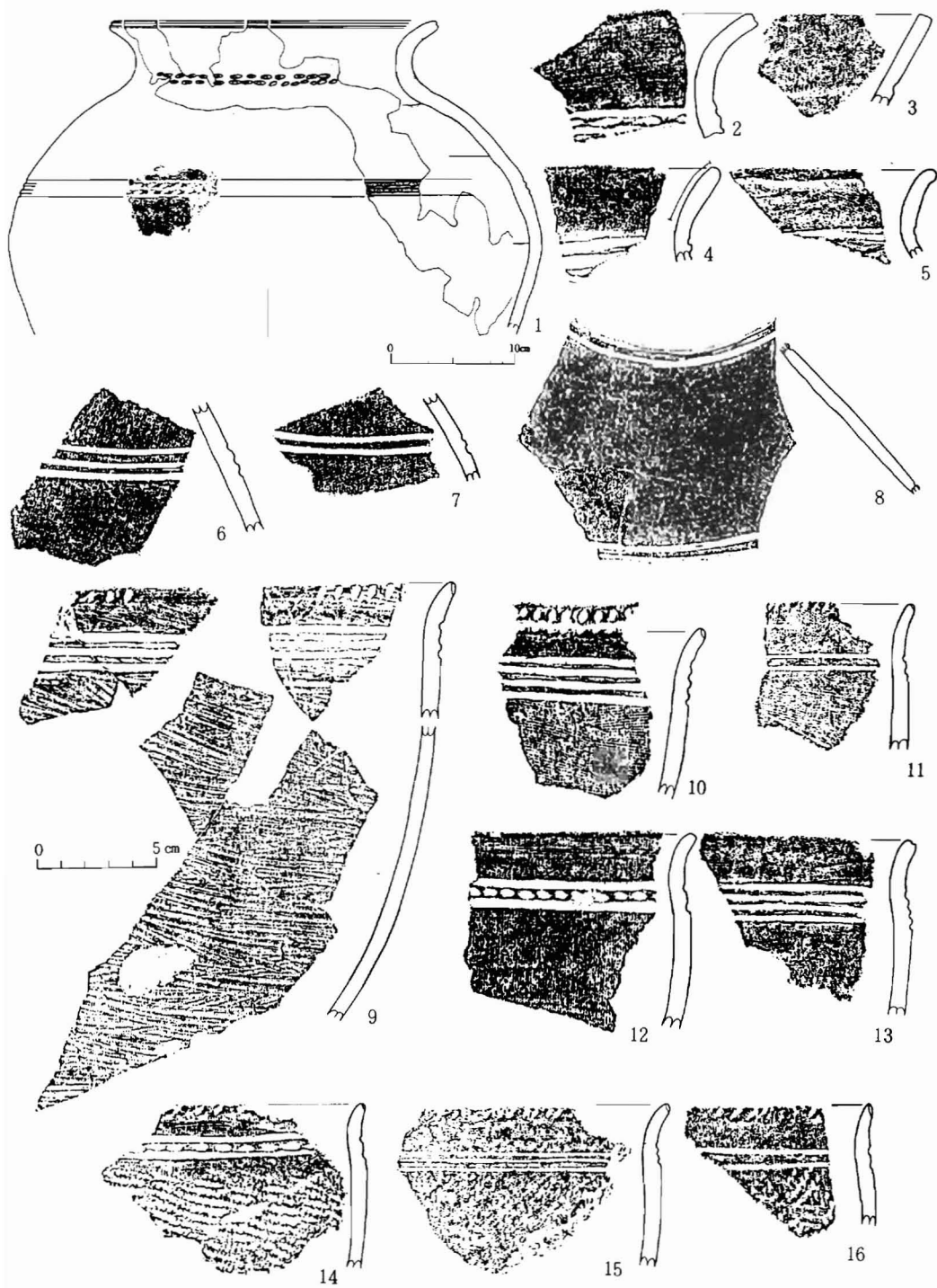


图3 是川中居遺跡



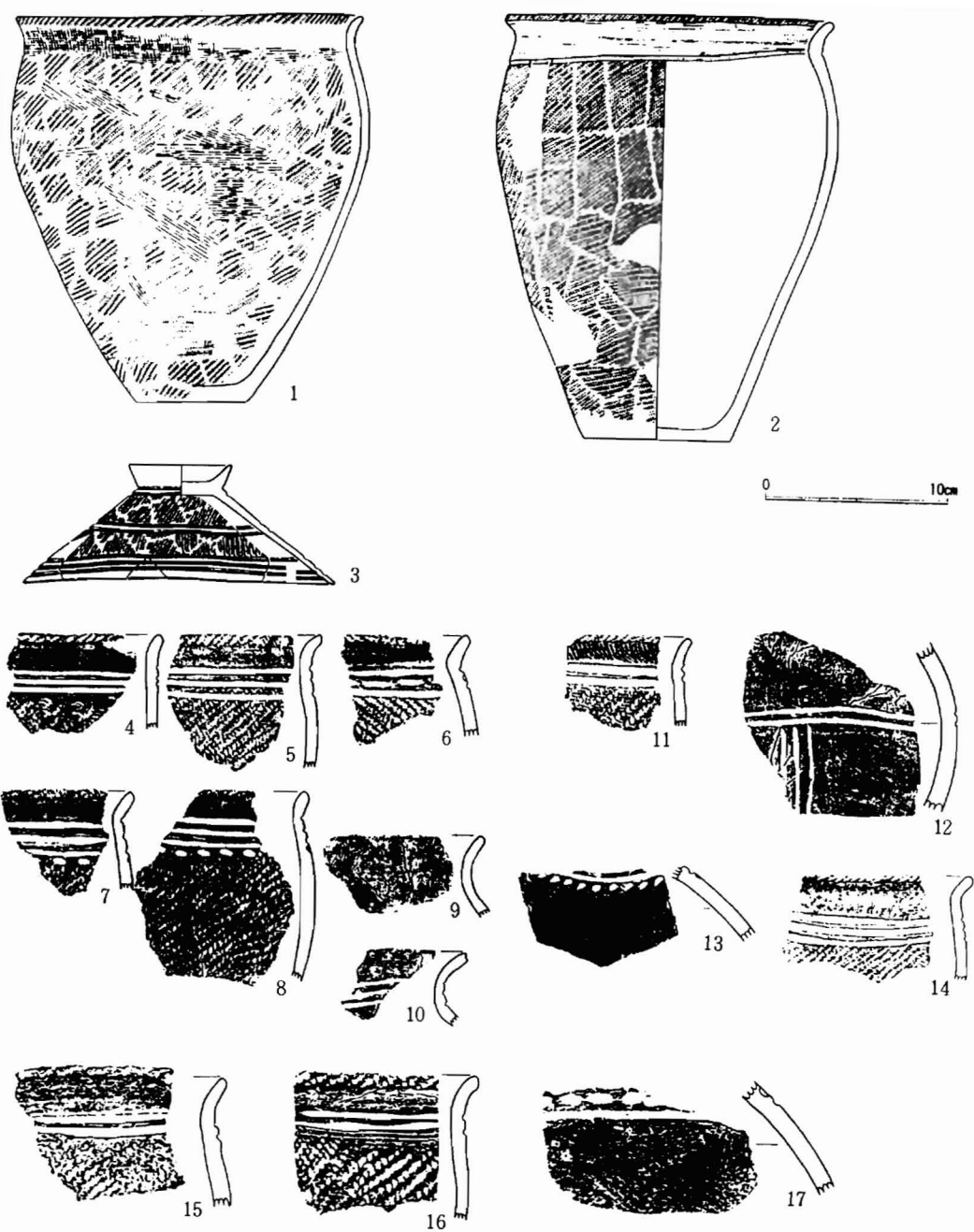


图 4 砂沢遺跡



である。

これらに類似する資料は、八戸市是川中居遺跡から出土した砂沢式に共伴する土器(図3)で(工藤、高島 前掲)、図3の壺型(1・8)は、口頸部と体部上半に二・三条の平行沈線文を巡らし、各々の個所に連続刺突文を施す場合がある。9は条痕文、10と11はハケメ、12と13は無文、14・16は縄文を体部に持ち、口縁部に2・4条の平行沈線文を施すと共に沈線文の間に刺突文を付す場合がある。

両者の間には様々な異同する点がある(表2)。最も違う点は、刺突文のある遠賀川系は剣吉荒町にはなく、明確な大型、小型の甕型が是川中居にないことである。そういう点では、一型式古手の剣吉荒町の方が遠賀川系としてはよりダイレクトであると共に、器種組成が多様性を持っていると思う。その他に、ハケメの用い方、平行沈線文の条数、位置、太さなどに多少の差があるし、遠賀川系といえない条痕文の土器の条痕の施こし方、口端の刻目の付し方などに微妙な差もある。両者を比較すると、同時期の遺跡間の違いとみることができない訳ではないが、似て非なるものとして多少の年代差を意味するものと考えられ、剣吉荒町の方がより古手の様相を体していると理解できる。

砂沢式のタイプ・サイトである弘前市砂沢遺跡では、一九八七年の発掘で砂沢式期の水田跡が発見された(弘前市教育委員会 一九八八)。ところが遠賀川系の影響は予想に反して少ない。ハケメなどの器面調整にみる技法は顕著に採用されているが、そのブライマリーな器種、器形に乏しい。深鉢型を呈する甕型はどちらかというと是川中居の例に近いといえるものの、それらより口縁部の外反がやや強く体部がややふくら

んだり(図4の1、2)、口頸部の平行沈線文の下位に連続刺突文が位置する(7、8)といった違いがある。こういう異同は壺型にもみられ、口端に溝が入るもの(10)は是川中居にもあるものの、ハケメを使った後に磨いた上に横位平行沈線文の下位に刺突文が平行して施されるもの(13)や、横位沈線文に対して懸垂状の沈線文を施すもの(12)が出現するといった特徴もみられる(図4)。

その一方で、砂沢式を構成する器種組成の上では、無頸に近い壺型、蓋型、甕型などに新たな変容、展開がみられる。その変化の原因を直ちに遠賀川系の影響に基づくものとみなすにはなお検討を要するが、それがすでに潜在的に浸透した所産を物語るものと理解することができる。そういう点でこの段階になると、遠賀川系と容易に識別できる土器が比較的少ないのは、遠賀川系の技法上の特徴がすでに砂沢式の段階では砂沢式を構成する血肉となって消化(同化)され、一体化した段階に入っていると解釈することができる。

このように、剣吉荒町、是川中居、砂沢の関係は古い順に年代的過程を示し、前二者の段階では在地の伝統的な土器に遠賀川系の土器が共伴する関係にあり、その特徴が同化して型式を構成したのが砂沢式と把握される。したがって、佐原説と須藤説の違いを筆者はこのように認識したい。

本州の北部に遠賀川系の土器が派及した大洞A式からその影響を強く受けて成立した砂沢式については、それらの細分の問題、砂沢式をこの地方の最初の弥生式とみるかという問題、全国的な視野に立った編年的位置づけの問題等々、様々な問題が山積している。



## 2 展開の段階

次いで、砂沢式以降の五所式（村越潔 一九六五）、井沢式（平賀町教育委員会 一九七六）になると、大型の口縁部がくの字状に強く外反し頸部と体部に平行沈線文と刺突文を施す長胴の土器が出現するようになり、甕型と無頸壺に分化して定着する田舎館式に変遷する。遠賀川系の特徴は、田舎館式にまで及んで認められる（青森県教育委員会 一九八五）。五所式から田舎館式までが次の段階のひとつの画期になる。

この段階を代表する土器は、無頸の壺型（図6の1、3）と大型長胴の壺甕型（図5の1、2、図6の2）である。無頸壺型はやや後出してみられ、図6の1のとおり大型長胴壺甕型から発達した器種の可能性がある。大型長胴壺甕型は、砂沢式の中から発達したもの（図4の13、須藤隆一九八三の第18図）と思われるが、剣吉荒町遺跡第2地区（青森県立郷土館一九八八の図29の80）にも見い出すことができる。これは五輪野遺跡（尾上町教育委員会 一九八三a）にみるとおり合わせ口の甕棺（図5の1、2）として用いられ、岩手県二戸市金田一川遺跡（亀沢磐 一九五八、芹沢長介 一九六〇）や秋田市地蔵田B遺跡（秋田市教育委員会 一九八六）などにもよく知られている。

無頸壺型、大型長胴壺甕型にしろその器種は、遠賀式自体には全く例がない。ハケメなどの技法を採用しただけで、その出現の理由はまだ研究されていない。大型長胴壺甕型の器種の最古例は名川町虚空蔵遺跡（江坂輝弥 一九六〇）の大胴C2式とされるものにある。恐らく、従来粗製土器とされてきたものの中にこの系統を引くものがあると思うが、剣吉荒町遺跡第2地区の資料の中には、蓋として被せた広口の鉢型はい

くつか出土している。その好例が金田一川遺跡の資料である。それはかつては大洞A'式とされたが、最近では砂沢式とされることが多い。先般（一九八八年四月）に岩手県玉山村の啄木記念館で開催された秋浜三郎展で見学した限りでは、蓋に使われた土器と施文技法を同じくするものが剣吉荒町に出土しており、大洞A'式の範疇で扱えてよいと思う。ただし、甕棺の本体の土器は今のところA'式には見当らず、砂沢式の古手のものに伴うものであろう。

秋田県では地蔵田B遺跡の他に秋田市湯ノ沢A遺跡（秋田市教育委員会 一九八四）に好例がある。型式的には砂沢式を主体にしている。これにやや後出するものに若美町横長根A遺跡（若美町教育委員会 一九八四）、男鹿市大倉遺跡（児玉準 一九八七）などがある。

五所式、井沢式に特徴的な大型長胴壺型の土器は、上記したように遠賀川式とは直接係わるものでないことはその編年の位置づけからみても当然である。その出現は複雑な階程を持っていると考えられ、直接的には砂沢式の中から生れたものであろう。しかし、その器種は在地のもの（伊東信雄 一九八四）である。東北々部の東部（太平洋側）ではそのルーツは上記の虚空蔵にあるが、資料的にはまだ断続的である。金田一川遺跡と剣吉荒町遺跡第1地区から出土した土器との関係については、伊東氏が述べている（伊東 前掲）とおりである。

しかし、何故、或はどういう過程の下にこの器種が生まれ、青森県ではそれが五所式、井沢式に盛行したかという問題を考える必要がある。そして、さらにそれが無蓋壺に発展すると考えられるので、その鍵は鉢型を転用した蓋を含む蓋型と資料的にまとまって出土している地蔵田B



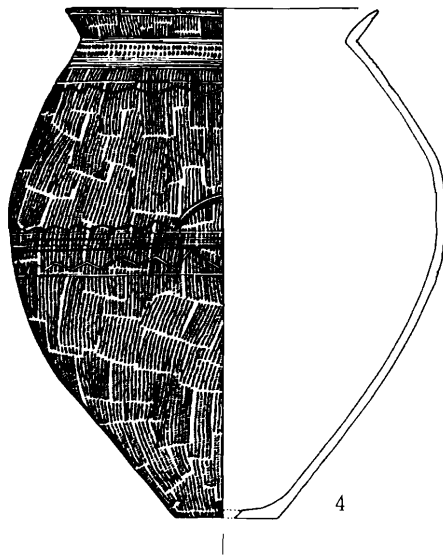
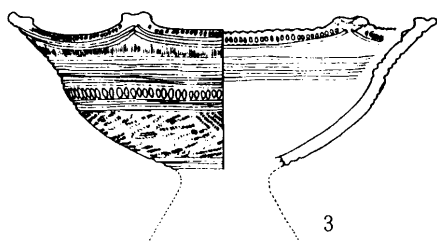
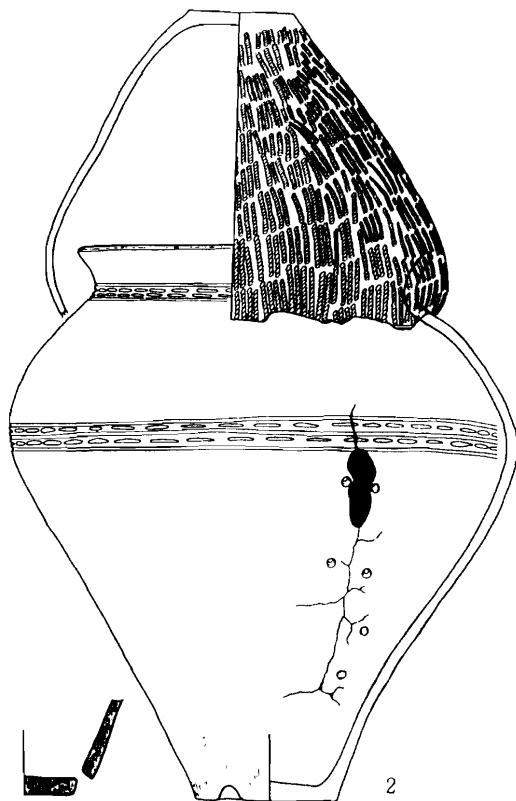
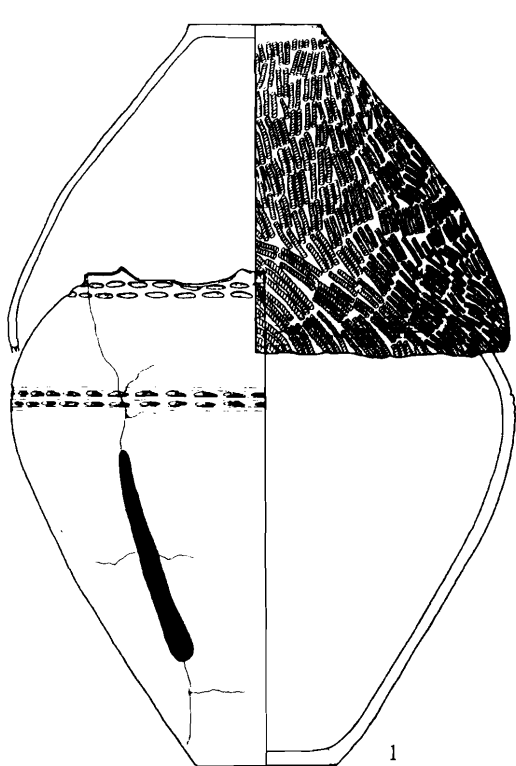
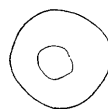


図5 五輪野遺跡



0 10



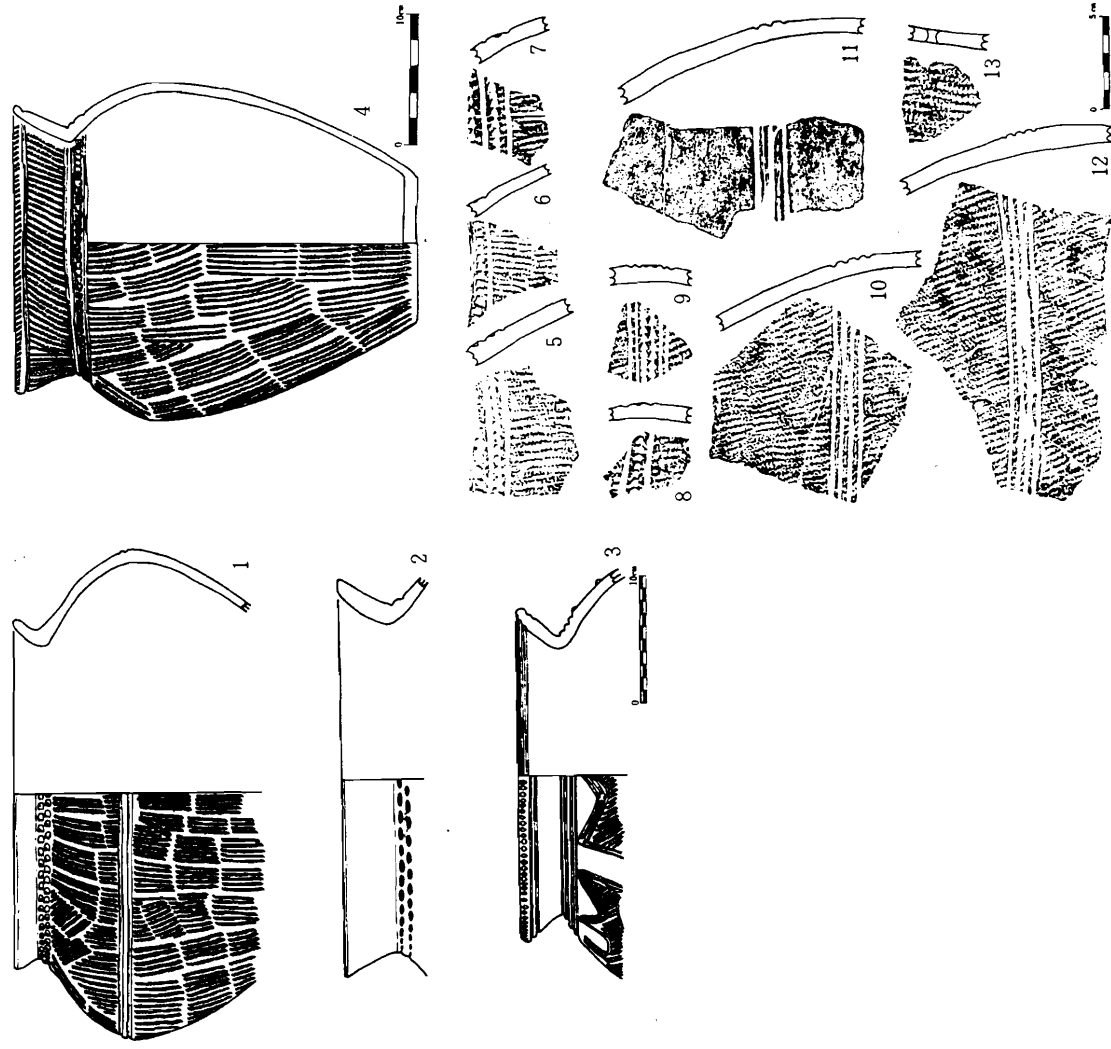


图6 井沢遺跡



遺跡の類例によって推考することができると思われる。

まず、無蓋の壺型と短頸の壺型（主に大型のもの）は、転用蓋とセツトになって甕棺に用いられたものと考ええる。この仮説を前提とすると、それは埋葬用の土器で、元来は壺型をベースとする。壺型に蓋を被せる用法は古くからあり、大洞C2式あたりからみられる。いずれも小型で三角帽に類した型である。その直系が主に東西南部にみられる台付鉢型を呈する蓋型土器であらう。秋田、青森県では砂沢式に出現する（図4の3）。その傍系が鉢型の転用蓋であらう。青森県では大洞A'式に盛行するようになり、秋田県では地蔵田B遺跡に好例が多く出土している。その地蔵田B遺跡の様相が実に複雑なのである。

地蔵田Bでは、深鉢型の甕型には同じもの、壺型には台付鉢型の蓋、壺甕型には鉢型の転用蓋が用いられるというパターンがある。これは比較的基本的な用法を示しているものと思われる。恐らく、その理由は棺本体の口径の大きさに直接起因するであらうが、葬法の差も考えられる。

次のキーポイントは、何故この器種が壺型を基調としているかの解釈にあると思う。つまり、何故壺型に或は埋葬用土器に遠賀川系の技法が採用されたのであらう。逆説的にいえば、本来本州北部に及んだ遠賀川式の器種は深鉢型甕と壺型であったことによる。つまり、遠賀川式の技法上の伝播は、単に技法だけがひとり歩きし情報のみが伝わったのではなく、生活文化として伝わっていたことを意味する訳である。その媒体が、生活用具である煮沸用の土器であり、埋葬用の土器であった。埋葬用の土器であるからこそ、在地の埋葬用の土器に合体したのである。

しかしながら、その葬法の実体やこの時期に大型棺が発達した理由、何故東日本の伝統的な壺型をベースとする葬法に留まったか、或いはまた砂沢式に間に介在した土器型式の器形、文様の系統の多様性など課題は少なくない。

## おわりに

本州北端において弥生文化は、大洞A式、A'式の段階に確実に及んでいる。初めまず文物が伝わり、後に稲作農耕が伝わった。東北の亀ヶ岡文化は、こういう事情と背景を受けて変容してゆくものと思う。この過程は土器型式の詳細な研究を通して明らかになるであらう。小論では意図的に土器以外の遺物についてはふれなかったが、近年青森県では剣吉荒町と砂沢遺跡で大洞A'式と砂沢式の良好な資料が得られたので、両型式の細分を通してこの問題が検討されなければならない。小論では、遠賀川系などの異系統土器についてその派及の消長を理解することに努めた。しかし、大洞A式並びにC2式との関係については課題を残した。

また、秋田、岩手県について十分な検討を行えなかったのも心残りであるし、砂沢と地蔵田B遺跡の比較検討にも意を尽せなかった。

遠賀川系の土器についても、佐原氏や工業氏のように全国的に把握している訳ではない。児玉氏も述べているように、北陸地方との比較は心掛ける必要がある。ひととおり筆者なりに北陸を除いて比較するべく努めたが、似て非なる点が強いことを感じた。遠賀川系といえどもやはり在地（出土地近辺）の製作によると考えてよいのではないかと思う。基



本的には縄文土器の型式的な伝播と同じ考えをしてよいと思うが、遠賀川系の場合、胎土、焼成、色調など土器製作に影響がみられる点が特徴的である。同時に、遠賀川式、遠賀川系の用語は吟味してかかる必要があり、厳密には筆者がまだ調査していない北陸を除いてそれ以西の土器がダイレクトに搬入されているとは考えられない。恐らく、リレー式の中立ち、中継を経たものであろう。その過程も巨視的には西から北へ向かうものであるが、スクランブルにあったものと思うし、一系統でないと思う。年代差或いは東北の西と東の地域差と似て、選択された情報が動いているようにも思える。大洞A式とそれを出土する良好な遺跡の検討によって考えてゆきたいと思う。

さらに、この問題は遠賀川系の担い手つまり主体者の性格と深く係っている。佐原氏はどちらかというと日本海沿岸を舞台にしたダイレクトな人々の西日本からの移住を想定している。弥生文化の日本海伝播論は古くから伊東雄氏氏が提唱したところのもので（伊東 一九七〇）、大筋としては首肯できるであろうが、彼（女）らの本籍が西日本にあるかどうかは、胎土分析の結果でも「丹後地方以西から直接搬入されたとするほかに、その間の地域で遠賀川式を模倣したものがさらに運ばれた可能性が全くなしとはいえない」（清水 前掲）と両論併記の立場をとっているように、間接伝播の可能性もあってなお検討を要すると思う。ただ、一点でもそれなりの結果が出たことは、卒直に受けとめる必要はある。

伝播論については、なお一層の資料的な蓄積を待つて検討してよいであらう。遠賀川系が東北に進出すること自体当然稲作農耕の問題と表裏

の関係にあり、弥生ナイズの前哨戦といえる。稲作農耕の受容の過程は地域性を強く持っているので、列島にみる東西の差は著しいし、複雑である。列島の東とりわけ東北の当該期の様相は、東北のいずれの地に遠賀川系が出土してもすべて縄文社会の枠を越えるものでない。その主体性は縄文人と縄文社会の問題に帰結するであろう。遠賀川式が本来の形式を保ちながら東方に波及するのは畿内までであって、それ以东や以北には網の目をくぐった限られた文物や土器葬法、農耕の技術など選択された文化要素だけが伝播する特異性があり、西を特徴づける階層分化を示す墓制や鏡、銅鐸などの青銅器に代表される弥生文化の体制は及んでいない。

土器と水田という一見して文化と社会の構造を考える上で正合するかなのような主たる要素も、それを繋ぐ構造的な他の主要素である墓制などを欠く以上、直ちに（社会の）体制が変わったと考える訳にはゆかない。何故なら、例えば遠賀川系土器を出土する遺跡があっても、そのみを出土する遺跡はない。その一方で、砂沢遺跡の水田跡、地蔵田B遺跡の特殊な集落跡の存在と、遠賀川系土器は無関係なものではないであらう。小論の執筆にあたり、佐原真氏、須藤隆氏、中村五郎氏、高島芳弘氏の他、多くの方々に便宜をいただいた。謝意を申し上げたい。

#### 参考文献

青森県教育委員会 一九八五 垂柳遺跡  
青森県立郷土館 一九八八 名川町剣吉荒町遺跡（第2地区）発掘調査

報告書



秋田市教育委員会 一九八四 秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発

掘調査報告書(湯ノ沢A遺跡)

秋田市教育委員会 一九八六 秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財

発掘調査報告書(地蔵田B遺跡)

市川金丸、木村鉄次郎 一九八四 青森県松石橋遺跡から出土した弥生

時代前期の土器 考古学雑誌 六九—三

伊東信雄 一九五〇 東北地方の弥生式文化 文化 二—四

一九六〇 東北北部の弥生式土器 文化 二四—一

一九七〇 稲作の北進 古代の日本八

一九八四 青森県における稲作農耕文化の形成 東北文化研

究所紀要

一九八五 東北地方における稲作農耕の成立 日本史の黎明

岩手県教育委員会 一九七二 長谷堂貝塚

岩手県埋蔵文化センター 一九八三 君成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書

江坂輝弥 一九五七 奥羽地方北部の縄文文化の問題 貝塚 六三

尾上町教育委員会 一九八三 a 五輪野遺跡調査報告書

一九八三 b 丑盛の調査(第一次)

亀沢磐 一九五八 福岡町の金田一川遺跡 岩手史学研究 二九

草間俊一 一九七八 岩手県の弥生文化 北奥古代文化 10

工藤竹久、高島芳弘 一九八六 是川中居遺跡出土の縄文時代晩期終末

期から弥生時代の土器 八戸市博物館紀要 2

工藤竹久 一九八七 a 是川・剣吉荒町遺跡の遠賀川系土器 考古学ジャ

ーナル 二七三

一九八七 b 東北北部における亀ヶ岡式土器の終末 考古学

雑誌 七二—四

工楽善通 一九八七 遠賀川・砂沢・水神平 季刊考古学 一九

児玉準 一九七五 男鹿半島の弥生式土器 男鹿半島研究別冊

一九八七 男鹿市大倉遺跡出土の弥生時代遺物について 秋田

県埋蔵文化センター研究紀要 二

後藤直 一九八六 農耕社会の成立 日本考古学 6

佐原真 一九八六 縄文／弥生 日本考古学協会昭和61年度大会研究発

表要旨

一九八七 みちのくの遠賀川 東アジアの考古と歴史 中

一九八七 東北地方における遠賀川系土器 弥生文化の研究 四

清水芳裕 一九八七 人が動き土器も動く 季刊考古学 一九

菅原俊行 一九八七 地蔵田B遺跡 考古学ジャーナル 二七三

杉原荘介 一九八六 下野・野沢遺跡及び陸前・杵形田貝塚出土の弥生

式土器の位置に就いて 考古学 七—八

鈴木克彦 一九八三 青森県松石橋遺跡出土の弥生式被籠土器 考古風

土記 八

一九八六 青森県における縄文晩期から弥生への変遷 日本

考古学協会昭和61年度研究発表要旨

一九八七 亀ヶ岡文化圏の様相 月刊文化財 二八一

須藤隆 一九八三 弥生文化の伝播と恵山文化の成立 考古学論叢 1

一九八四 東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開

宮城の研究 八二十一頁下段に続く



表1 青森県内の遠賀川系等の土器出土地名表

No.	市町村	遺跡名	河川	伴出型式	器種	その他	文献	備考
1	名川町	剣吉荒町遺跡	馬淵川	砂沢式	壺型、甕型、深鉢型		江坂輝弥 一九五七 伊東信雄 一九八四他	第1地区
2	名川町	剣吉荒町遺跡	馬淵川	大洞A式	壺型、甕型、深鉢型、蓋型	渦文	青森県立郷土館 一九八八	第2地区
3	南郷村	松石橋遺跡	新井田川	不明	壺型		鈴木 一九八三	
4	八戸市	是川中居遺跡	新井田川	砂沢式	壺型、甕型、深鉢型		市川、木村 一九八四 工藤、高島 一九八六	
5	八戸市	堀田遺跡	新井田川	砂沢式	深鉢型		八戸市教委 一九八一 工藤竹久 一九八七	
6	八戸市	小峠		不明	甕型		栗村知弘 一九六〇	(未報告)
7	八戸市	八幡遺跡	馬淵川	砂沢式	壺型			
8	田舎館村	垂柳遺跡	浅瀬石川	田舎館式	壺型、甕型、台付鉢型、蓋型		青森県教委 一九八五	
9	尾上町	五輪野遺跡	浅瀬石川	井沢式・田舎館式	甕型、杯型、蓋型		尾上町教委 一九八三	
10	平賀町	井沢遺跡	唐竹川	井沢式	壺型、甕型、蓋型		平賀町教委 一九七六	
11	弘前市	砂沢遺跡	岩木川	砂沢式	壺型、甕型、深鉢型		須藤隆 一九八三	
12	弘前市	清水森西遺跡	岩木川	五所式・井沢式	甕型、蓋型		工藤国雄 一九七八	
13	弘前市	神原遺跡	岩木川	五所式	甕型		福田友之 一九七一	
14	相馬村	五所遺跡	岩木川	五所式	甕型		村越深 一九六五	
15	岩木町	薬師Ⅱ遺跡		大洞A式	注口型	双頭渦文	田村誠一 一九六八	
16	鯉ヶ沢町	大曲	鳴沢川	砂沢式	壺型			(未報告)
17	鯉ヶ沢町	大曲	鳴沢川	砂沢式	深鉢型			(未報告)
18	深浦町	吾妻野Ⅱ遺跡		二枚橋式	甕型		三宅徹也 一九七六	



表2 文様要素の異同

鉢			甕			壺			器種
深部	鉢部	口端	体	頸	口	体部	口頸部	口端	形部
縄文 無文	沈線文 沈線文+刺突文	縄文 刻目	無文	沈線文	刻目	沈線文 沈線文+刺突文	沈線文 刺突文 沈線文+刺突文	凹線 丸味	文様要素
++	+	+	+	+	+	+	+	+	吉 荒町
++	++	++	+	+		++	+++	++	川 是 中居
+	++	+				++	+	++	沢 砂

※

※

※

△十九頁下段より続く▽

一九八六 東北東部における縄文晩期から弥生時代に関する諸

問題 日本考古学協会昭和61年度大会研究発表要旨

一九八七 東日本における弥生文化の受容 考古学雑誌 七三一

一

一九八七 東日本における弥生文化の成立と展開 弥生文化の

研究 四

芹沢長介 一九六〇 石器時代の日本

中村五郎 一九七六 東北地方南部の弥生式土器編年 東北考古学の諸

問題

一九八二 畿内第一様式に並行する東日本の土器

林謙作 一九八七 続縄紋のひろがり 季刊考古学 一九

平賀町教育委員会 一九七六 井沢遺跡

弘前市教育委員会 一九八八 砂沢遺跡

村越潔 一九六五 東北北部の縄文式に後続する土器 弘前大学教育学

部研究紀要 一四

家根祥多 一九八七 弥生土器の誕生と変貌 季刊考古学 一九

山内清男 一九三二 縄文土器の終末 ドルメン 一ノ六・七

一九三九 日本遠古之文化補註

若美町教育委員会 一九八四 横長根A遺跡

(青森県教育庁文化課)